

慰霊の日



常任理事 涌波 淳子



6月23日慰霊の日に稲田副会長、銘苅理事、仲村理事、久貝先生、崎原事務局長はじめ事務局の皆さんと共に沖縄戦殉職医療人之碑、ひめゆりの塔、沖縄陸軍病院之塔、魂魄の塔に献花、焼香をさせていただきました。空は青く晴れ渡り、日差しは強いものの日陰に入ると涼しい風の中に鳥の鳴き声が聞こえる道を歩きながら、「80年前のあの日、当時の県民はどんな思いで空を見上げたのだろうか」と想いをめぐらせていました。沖縄戦殉職医療人之碑は、地元医師・薬剤師・看護師等約50名の方々を合祀した慰霊碑という事で、沖縄県薬剤師会の役員の皆様もご一緒に手を合わせました。ふとその横を見ると誰もお参りをしていないような小さな慰霊碑「陸軍病院第三外科職員之碑」がひっそりと建っている事に気がつきました。女性名が多く刻まれているその碑は、1945年6月19日に米軍のガス弾攻撃でほぼ全員が殉職した第三外科の軍医と看護師たちの慰霊碑だそ

うで、私たちはその碑にもお線香をあげさせていただきました。

その後、カトリック中学校の生徒たちや子供連れの3世代と思われる家族連れにも出会い、平和教育を学校任せにしてしまった自身の子育ての在り方を反省させられるとともに、戦争経験者がどんどん減っていく中、戦争の不合理性、恐ろしさをどのように伝えていくのかを考えさせられました。陸軍病院之塔では、「春くるとひたすら待ちし若草の萌え立ついのち君は捧げぬ」「水汲みに行きし看護婦死ににけり 患者の水筒四つ持ちしまま」と書かれた碑があり、思わず涙がこぼれました。物資不足の中で自らの命を鑑みず、ただひたすら負傷兵のために働き、命を落とした医療従事者や看護学徒隊の少女たち、十分な医療も受けられないまま亡くなっていった多くの人たち、私たちはその方々の命とひきかえに今の平和な沖縄で暮らしています。命を守る私たち医療従事者は、その重さ

をしっかりと受け止め、次世代に引き継いでいきたいと思います。

戦後 80 年以降の世の中を担っていく私たちにとっての慰霊の日の大切さをずっしりと感じ、来年からは院内でも 12 時の黙とうの時間をみんなで共有し、命を守る私たちは平和の担い手である事を自覚する時間として取り組んでいこうと決心しました。

